

その 31

『万葉幻視考』考(その 1)



泊瀬朝倉宮に天下治めたまふ天皇の代[大泊瀬稚武天皇]

天皇の御製歌

「籠もよ み籠持ち ふくしもよ みぶくし持ち この岡に 菜摘ます兒 家告らせ 名告らさね そらみつ
大和の国は 押しなべて 我こそ居れ しきなべて 我こそいませ 我こそば 告らめ 家をも名をも」
(籠も良い籠を持ち、ふくも良いふくを持って、この岡で菜を摘まれる乙女子よ、ご身分は。名も明かされよ。(そらみつ)この大和はことごとくわたしが君臨している国だ。すみずみまで、わたしが治めている国だ。わたしの方こそ告げよう、身分も名前も) 雄略天皇(巻 1・1)

高市岡本宮に天下治めたまふ天皇の代[息長足日広額天皇]

天皇、香具山に登りて望^{くにみ}国したまふ時の御製歌

「大和には 群山あれど とりよるふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば 国原は 煙立ち立つ
海原は かまめ立ち立つ うまし国そ 秋津島 大和の国は」
(大和には群山があるが、特に頼もしい天の香具山に登り立って国見をすると、広い平野にはかまどの煙があちらこちらから立ち上っている。広い水面にはかもめが盛んに飛び立っている。ほんとうに良い国だね、(あきづ島)この大和の国は) 舒明天皇(巻 1・2)

ここに、読んで心がワクワクするほど魅力的な、1冊の万葉本がある。数多ある万葉集の学術書としては類を見ないほどに大胆にして個性的、また、専門書の例にもれず難解ながら、一般読者をも魅了するこの本は、書名からして異彩を放っている。その名は、『万葉幻視考』(昭和 53 年、集英社刊)。著者は、本稿の(その 27)作家阿川弘之氏の「日めくり万葉集」のインタビューから、突然その名が飛び出てきた万葉学者大浜^{いっぴこ}巖比古氏である。氏の名前も、本の書名も、ともに耳にしたのは初めてだったこともあり、500本近い「日めくり万葉集」の制作に追まわられて、その 2 つの名前のことはすっかり忘れていた。それから 10 年以上後、コロナ禍の巣ごもりを機に、それまでの「万葉集宣伝係」の活動記録をまとめ始めた時、ふと、「幻視行」……? それとも、「幻視考」だったか、あったなあ、と「異彩を放つ」書名の一部が脳裏に浮かんできた。そこで、古書ネットを検索し早速入手して、一読。初めて万葉集に一目惚れした時のように、『万葉幻

視考』に魅入られてしまったのである。刊行から 40 数年、一部の研究者を除いてほとんど知る人がいない「知られざる名著」……『万葉幻視考』。阿川氏の回で予告したように、今回から 3 回にわたって紹介する。

紹介にあたっては、この著者と著作が発する独特の魅力、そして、その晦渋さをそのままストレートに伝えるために（それでもなるべく分かりやすいところを）、原文のままできるだけ多く引用して紹介することにしたい。

まずは、著者の大浜氏と阿川氏との関係を、1 篇の小説から振りかえってみる。

そう言えば、『万葉幻視考』が刊行された昭和 50 年代、私は、阿川氏の戦記物を何冊か読んだ。最初は、代表作とされる『米内光政』で、それを読むきっかけは、ヒロシマだった（米内とヒロシマの関係については、いずれ記す）。次いで、『山本五十六』（元帥の末っ子は、職場の親しい同僚だった）。そして、今回取り上げる、初期の代表作『雲の墓標』（昭和 31 年、新潮社刊）である。

この小説は、特攻隊員として散っていった海軍予備学生の日記の形をとり、厳しい訓練の日々、生と死の恐怖に苦しむ若者たちの姿を余すところなくとらえている。とりわけ、「修正」と呼ばれた日常的なピンタや鉄拳制裁、訓練中の事故死や特攻出撃の際途中の島に不時着して生き延びようと企てる若者の姿などが、今回 30 数年ぶりに再読して、まだはっきりと記憶に残っていた。そんな、いずれ散っていく若者たちが、万葉集を熱く語っていたことをかすかに覚えていたことがきっかけで、作者の阿川氏も万葉集に深い思い入れを持っていることを知り、「日めくり万葉集」の選者として出演を依頼することになったという経緯があった。

小説を読み直して、そこに登場する 4 人の海軍予備学生が、京都帝国大学で万葉集を専攻する仲間だったことを改めて知った。小説では、この 4 人の内 3 人が、訓練中の事故と特攻で命を落とすが、実は、この小説は、その 4 人のうちの 1 人が書き残した日記に基づいて書かれた実話だった。ただ、主人公の吉野次郎は、小説では特攻死したことになっているが、実際は出撃の前に敗戦を迎えたため命永らえ、戦後は国文学者となった元帝塚山学院大学教授の吉井巖^{いよお}氏だったことが分かった。そして、もう 1 人、特攻に疑問を持ちながら、やはり生き残った隊員、鹿島のモデルが、今回紹介する万葉学者大浜巖比古氏で、阿川氏の旧制広島高等学校時代の親友だったのである。その縁から吉井氏の日記を入手することになるのだが、その時の経緯を、阿川氏はその後明らかにしている。

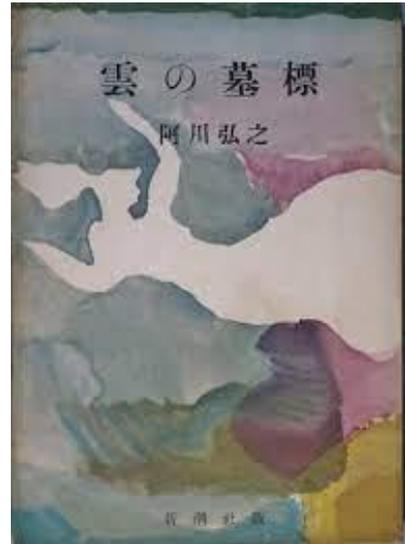
＜昭和 29 年のいつごろであつたか、大浜の友人の使ひと称する未知の男が、夜半青山の茅屋へ、奈良から突然訪ねて来た。ずゑん酔つてゐるらしく、手にしっかりと握ったきたない風呂敷包みを振りかざすやうにして、「大浜さんが、天理大学の大浜さんが」と叫ぶのが、初め何のことか分らなかつた。ともかく上つてもらひ、話を聞いてみると、風呂敷包み（もしかすると新聞紙包みだったか）の中身は特攻隊員の日記だといふ。上京のついでにこれを阿川に渡して来いと、大浜さんから頼まれた――。

包みの中から、細字でぎっしり書きこんだ戦争中の大学ノートが 4、5 冊出て来た。酔っぱらひの話を整理すれば、日記の筆者は大浜巖比古と京都大学国文科の同級生、吉井巖といふ人である。吉井は、学徒出陣で海軍に入って以後、飛行科予備学生を志願し、特攻要員として死に直面させられるまでの日々の丹念な記録をつけてゐたが、出撃命令が出ないうちに戦争が終つた。戦後、大浜が此のノートを貰ひ受け、いづれ何か書いてみるつもりで机辺に置いてゐたけれど、最近大浜も、本来の志であつた万葉集研究一本

に進む決心がつき、詩や創作の道から離れることにしたので、ついには阿川ならこれを何かの役に立てるかも知れない、届けてやってくれといふことになったのだと。

『雲の墓標』のもとになった特攻日誌は、ある晩かうして、何が何だかよく分らないやうなかたちで私の手に入った。天理大学から来た使者は、(略)ますます酔ひを癪し、私はとくに礼も言わずにお引き取り願ったやうに記憶するけれども、翌日吉井巖の日記を通読して感銘を受けた。ちやうど「新潮」に小説連載の約束があって、何をどう書かうか迷ってゐる時だったので、それまで漠然と考へてみた材料を捨ててこちらへ切り替へることにした>

(『阿川弘之自選作品』、「作品後記」、昭和 52 年)



大浜氏は、吉井氏の日記の他にも戦友たちとやり取りした書簡や自らの詩などを提供、『雲の墓標』は、阿川氏の代表作の 1 つとなったが、その後恩着せがましいことは一切なし、潔い、そんな男だったと、阿川氏は友を偲ぶ。阿川氏の「日めくり万葉集」のインタビューで、大浜氏の名が「突然」出てきた部分を再掲する。

<万葉集の中では、「^{かたかご}堅香子の花」の歌が一番好きです。というのは、昭和 17 (1942) 年に大学を繰り上げ卒業して海軍に入り台湾で厳しい訓練を受けている時、広島高等学校時代の中島先生門下の万葉仲間、同期の親友の大浜巖比古が、どこで見つけたのか、カタクリ (堅香子) の花の絵葉書に、「こんなものが君の慰めになれば幸い」と添え書きして送ってくれた思い出の歌だからです。その彼も 2 年遅れて海軍に入ってくるのですが、この歌が、厳しい訓練の間の慰めになりました。この親友の大浜は、戦後万葉学者になりました。56 歳の若さで亡くなりましたが、僕と違って何しろ、万葉集には詳しく。学問的な視点よりも、むしろ歌人、詩人としての視点からの興味深い論考が、『万葉幻視考』という 1 冊の著書にまとまっています。大浜の残した唯一の本です>

阿川氏は、大浜氏が亡くなった年に出版した『論語知らずの論語読み』 (昭和 52 年、講談社刊) に、大浜氏の最期の様子を書いているが、それによると、その後『万葉幻視考』となる本の原稿は、この時点では未完で、本にはなっていなかったことが分かる。

<齡知命にして「天智の^{すえ}裔の歌語り」と題するユニークな労作を雑誌に連載し始め、ようやく業績が世に認められようとした矢先、持病の糖尿病が悪化してたおれた。視力を失い、「こわいよう、こわいよう」と奥さんに言い暮して、この 2 月 9 日亡くなった。連載は未完に終わった。無念であったらうと思う。

奈良の天理まで骨拾いに行ってきたが、病におかされた骨は、煉瓦色をして、すが立っていた。解剖の所見では、血管も古ホースのようにぼろぼろになっていたそうである。

私と同じ大正 9 年^{さるどし}申歳の生れ、満 56 歳。積年の英雄的行為が命をちぢめたようだが、未だ晩年というほどの齡ではない> (P114~115、)

文頭の「齡知命」の「知命」とは、「50歳」の異称のことで、「50にして天命を知る」からきているが、本を書くことからすると、確かに遅咲きだった。

そして、亡くなった日からちょうど1年後の昭和53年2月、『万葉幻視考』が刊行された。今回それを手にして驚いたことがあった。この未完の原稿を本にした人が、私のすぐ身近にいたからである。そう、阿川氏を起点に、大浜氏につながる思いがけない人の縁があったのだ。その人が、「日めくり万葉集」や本稿の監修などで、私がお世話になっている、現在高岡万葉歴史館館長の坂本信幸氏だった。坂本氏は、大学時代、大浜氏に万葉を師事し、「大浜万葉の唯一人の弟子」を自称していたことを知った。坂本氏は、巻末の「解説」を執筆し、その末尾の肩書は、「遺弟 坂本信幸」、つまり、大浜氏の遺された弟子、となっていた。

ところで、(その27)で、私自身が、おこがましくも、大浜氏の「不肖の孫弟子」を自称していることを書いた。坂本氏が、「大浜万葉の唯一人の弟子」であるならば、坂本氏を、「唯一人の万葉の師」とする私としては、必然的に「孫弟子」になるのだが、つまり、間接的に私自身にもつながっていることになるのだが、ただそれだけの理由で「孫弟子」を自称している訳ではないことは後述する。いずれにしても思いがけないことだった。

また、『万葉幻視考』の「序」を書いているのが、「日めくり万葉集」で話を聞いた哲学者の梅原猛氏で、哲学科と国文科と科は違ったが、同じ京大で、梅原氏は大浜氏の5年後輩だった。学年は離れていたが互いに惹き合うものがあり、この本を出版社につないだのも梅原氏だった。氏は、大浜氏を評して、「天成の詩人で、まちがって学者になった、あるいはまちがって学者を志向した詩人ではないか」と紹介している。

それでは、無類の酒好きで、そのため若くして亡くなった大浜巖比古氏の死後に刊行された『万葉幻視考』を、その編集、解説にあたった「遺弟」坂本氏の了解と監修のもと、紹介していく。

『万葉幻視考』は、万葉集についてそれほど詳しくない私のようなものにとっては、かなり難解ではあるが、前述したようにそれでも読む人を虜にする魅力に溢れた本だった。まず、第1章『万葉集』への根源的な問いの書き出しからして、いきなり読者を、独特の大浜ワールドに引きずりこむ。(以下、< >内が、『万葉幻視考』からの引用部分)

<『万葉集』とはいかなる書物であろうか。私は或る時はこれを「鎮魂の書」と言い、或る時はこれを「清明の書」と言い、或る時はまた「誇り高き敗者の書」と言った。もっともこれを私見として公けにしたことはなく、永い沈黙の間の胸底の独語であった。

近く梅原猛氏は法隆寺の謎に挑戦された。その念力と自信に満ちた説得は眩目すべきものであったが、これを読みつける私には、梅原氏の法隆寺のイメージと隣り合って、常に『万葉集』が離れることがなかった。

まさに『万葉集』も謎の書物であり、「誰が、いつ、何の為に法隆寺を建てたか」という梅原氏の問いかけは、その傍らで同じく「誰が、いつ、何の為に『万葉集』を編んだか」という問いかけを強く私に促した。

われわれにはかつて「わからない『万葉集』」という命題でこのことに取組もうとした一時期があった。われわれというのは吉井巖氏、伊藤博氏と私とであるが、吉井氏はその「わからなさ」のよって来るところを明らかにするために『記紀』や『風土記』に入り込んでしまった。時に『万葉』に帰って来る時は常にその世界の匂いを漂よわせている。そして彼は『万葉集』を『古事記』につながるものとして考えているようだが、まだその点で私を納

得させるものを示してくれない。(略) そうなると梅原氏は私をおびやかす。氏は言う「私は万葉論を書く。それは絶望の書である」と。私にはその「絶望の書」の意味を予測し得る。若しその予測が中つたとすれば、おそらくそれはある部分で私の考えと相重なり、あるいは平行して同じ方向を志向することがあるであろう。私は氏の説得力とそれを支える憑かれた魂を「日本精神の系譜」で十分知った。その予測される『万葉』論の前には私の論は鎧袖一触がいのういつしよくであろうし、それが書かれた後では、私の出る幕などなくなるおそれもある。そうすると私はいそがねばならない。私はますます急がなければならないのである> (P11~13)

大浜氏は、万葉集を語り始めるにあたって、肝胆相照らしながら対抗心を隠さない後輩梅原氏との刺激的な知的交流から、まず書き出した。「近く梅原猛氏は法隆寺の謎に挑戦された」と、未来形と過去形が混淆して書いているように、梅原氏は、昭和 46 年 7 月から雑誌「すばる」で、『隠された十字架』の連載(3 回予定)を始めている。一方、『万葉幻視考』の冒頭の第 1 章は、「天智の裔の歌語り」として、これだけが昭和 46 年 9 月の雑誌『文学』に掲載されている。つまり、最初の梅原論文が発売された直後、2 か月後だったことになる。大浜氏は、法隆寺は聖徳太子の怨霊を鎮魂する目的で建てられたという大胆な仮説を論じた梅原論文の初回を一読して、さぞかし胸躍らせただろうが、それ以上に、衝撃を受け、また焦ったことだろう。その後、大浜氏の論考は、梅原氏の紹介により雑誌「すばる」に移行して連載されることになるのだが、世話になりながら自分をおびやかす梅原氏に対抗して大浜氏の筆に、さらに力が入ったであろうことは、その後の経緯を見ても想像がつく。梅原氏は、その後、大浜氏に、「近く『絶望の書・万葉論』を書く」と予告した通り、昭和 47 年から同じく「すばる」で、歌聖柿本人麻呂は持統天皇により流罪とされ水死刑に処せられたとする『水底の歌』を連載、翌 48 年、単行本として出版している。梅原氏と大浜氏は、大胆な仮説を立て、それを論証していく手法は相通ずるところだが、次々に作品を世に問う多作の梅原氏に対して、酒が原因だったのだろうか、寡作の大浜氏は、そんな梅原氏の筆の勢いに「おびやかされ」、同じ「すばる」誌上で、自らを急き立てるがごとく、連載の筆をとったのだろうが、同時に死に急いでしまった。梅原氏も言う。

<私(たち)よりはるかに繊細な感覚の持ち主である大浜氏は、私(たち)のように強く、あるいはずく生きることは出来ずに、酒に鬱々たる幽憤をはらしていたわけであろう。(略) (もう少し早く知り合いになれば) 多分に詩人的心情を持ち合わせている「2 人の反逆者」の間に共感が生じ、大浜氏が私のように多くのものを書いたかもしれない。(略) 逆に私が大浜氏のデカダンスに影響され、2 人とも破滅の道を一直線に進んでいた危険もあったろう> (P3)

梅原氏は、大浜氏と自らを、「2 人の反逆者」と書いているように、大浜氏の中に自分自身を「幻視」したのだろうか。

次いで、大浜氏が名前を挙げているのが、あの吉井巖氏である。阿川氏の小説『雲の墓標』の主人公で、阿川氏の小説の素材となった海軍予備学生の時の日記を提供した大浜氏の仲間の国文学者である。

坂本氏は、この吉井氏と無類の酒好きの大浜氏の最後の酒の席の思い出を、「解説」に書いている。

<私の古い手帳を見ると、昭和 49 年 4 月 2 日の条に、「万葉学会編集会議あり。帰りに(大浜)先

生に飲み連れていってもらおう」とある。その日、会議が終ったからの帰り、帝塚山学院大学の吉井巖先生と一緒になり、私も誘って下さったのであった。難波の地下街で飲んだのだが、『万葉』の編集委員諸氏も昔はよく会議の後誘い合って飲んだのに、近頃は皆弱くなって早く帰るようになった、というような話から始まり、互いの健康に対する注意、学徒出陣の頃の思い出話、阿川弘之氏の小説『雲の墓標』の資料となった吉井巖先生の日記にまつわる思い出話等、何時になくしみじみした酒であった。吉井先生とはそこで別れたが、それから、おこぜの刺身を食べに連れて行ってやろうということで、結局はしご酒となった。

1週間程経って、大浜家に伺うと、あの次の日から身体の具合がおかしくて全然飲んでいないということであり、心配しているうちに、やがて闘病生活に入られたのである。この後、無類の酒好きの先生は、とうとう1度も酒を召し上がることなく世を去ることになった。先生最後の酒の相手が、大学時代からの親友であった吉井巖先生と、大浜万葉の唯一人の弟子とであったことには、1つの因縁を感じざるをえない> (P295～296)

その後、第1章で、大浜氏は、『万葉集』は、<「誰が、いつ、何の爲に」という問いかけに対し、その答えの最初は『万葉集』の性格の規定からはじめなければならないであろう>として、<胸底でつぶやいていた私の『万葉集』の性格づけをすれば、(略)鎮魂の歌の集、清明の歌の集、誇り高き敗者の歌の集、(そして)、そのトータルが『万葉集』というのである>と、まず定義づける。そして、『万葉集』が序を持たぬ意味や、巻1の巻頭頌歌と2番歌との空白の意味など、かつて誰もが問おうとしなかった根本的な疑問を投げかける。その内の、冒頭に掲げた2首の歌、この「巻1巻頭頌歌と2番歌との空白の意味」について、次のように書く。

<数多い天皇の中からはなぜこの2人の天皇に限定して、かかる形で、巻1巻頭に据えられたかということである。私の『万葉』鎮魂歌集の説も、ここから始まる。(略)この2つの(天皇)像(歌)の間、即ち『万葉』巻1の巻頭には———ということは、『万葉』全巻の巻頭には、非命に斃れた亡霊の群像が立ちさまよっていることになるのである。

これはいったいどういうことであろうか。このところを時間をかけてじっくり考えてみたいのであるが、今は予想される結論しかいういとまがない。『万葉』はそれら亡霊たちにたむける鎮魂の歌集だということの、これは暗示———かくされた表明である> (P14～15)

そして、これらの疑問を、「幻視」という眼の方法により読み取ってゆく。すなわち、次のようである。

<巻頭の雄略歌は、2つのテーマを持つ。1つは前半求婚のよびかけ、「愛」である。1つは後半天皇としての權威の宣言、「力」である。ごく素朴にこの歌をよめば、それからどうなったのかという、これまた極めて素朴な質問が生れてくる筈だ。「愛」はどうなったのか。求められたおとめは応じたのか。応じなかった時のおとめの運命やいかに。応じたとしてもそれは天皇という「力」の前にやむなく応じたのではないか。あるいは『紀』の影媛の如く「力」に圧殺されたのではないかと。

つまりこの歌は「愛」と「力」のテーマを提起し「死」を予想させ、それについての以後の展開や結末はカタリ(空白)にゆだねるのである。この歌と、ここでカタリれることは、したがって『万葉集』の出発ということになる

わけである。即ち『万葉集』の「序」と考えられるのである> (P21~22)、
として、ウタと文字にはあらわれぬカタリの世界から、ライト・モチーフ、「鎮魂」を見るのである。

そして、「第2章 歌語りは存在する」で、「幻視による『万葉集』のよみ方」として、大浜氏は、今回のテーマである「幻視」について語り始める。

<私は第1章において、『万葉集』が鎮魂の書であることを述べようと試みた。意図するところは、『万葉集』がたんなる詞華集にとどまるものではなく、集全体を貫くライト・モチーフを持ち、それを語るためのテーマを持ち、ある時にはプロットさえ持ちながら、各巻々がそれぞれ巻自体有機的に統一され、そして全体としてまた有機的に統合された一大歌語り集『万葉』を志向したものであることを言おうとしたものであった。(略)

私は『万葉集』を歌——文字に記されたポジ——だけではよまない。私はそれを歌と歌との間の空白——文字のないネガ——と共によむ。ネガの中にカタリをよみがえらせ、そのカタリによってウタをつなぎつつ、またウタとカタリによって展開されてゆくプロットにみちびかれつつ、その歌巻が告げようとするものを実感してゆこうとする。それが私のよみ方である。そのよみ方は幻視による方法から生れた> (P28~29)

<歌語りの中で、とくに有名なものを指して歌物語りというのであれば、『万葉』の巻々をそういう意味での歌物語りの巻々だと見て一向差支えはない。というより私としては『万葉』こそを、そのように見たいのである。

つまり、世間話の中でも特に涙を誘う有名な有馬皇子の悲話とか、天津皇子の悲劇とか、歌を表に立て、その歌についてのカタリと共にカタラれるならば、それはまさしく歌物語りであり、そのカタリの部分は口誦だから文字によって記されることはなく、その歌々だけがあたかも詞華集の如く並んだというのが、私の『万葉』観であり、それが鎮魂というライト・モチーフのもとに「力」「愛」「死」というテーマによって編集されたのが、われわれの持っている現『万葉集』だと言おうとするのである> (P34)

<しかしながら今も言ったとおり、『万葉集』ではカタリの世界は空白であり、文字に表現されないところにある。その空白にカタリを聞こうとすれば、その方法は想像力によるしかない。想像の世界に入ってゆく契機としてのしっかりした歌のよみしかない。つまり歌をしっかりといていぬいによみこむことによって、はっきりしたポジの映像を描き、その映像と映像との空間の中に、その映像と並んで二重画像を現出し、その二重画像の幻視の中での対話によって、遥かに万葉びとの意図を聞きとろうとするのである。はかない幻視と幻聴の世界と人は言うかもしれない。しかし幻視幻聴こそが、遥かな時空を一挙に縮めるものであることを忘れてはならない。わが幻視の方法の由来はそこにある> (P35)

難解ですべて理解できたわけではないが、私は、全面的に共感する。壮大な大浜万葉の基本コンセプトを、私なりに、分かりやすくまとめてみるとこうなる。

「古事記や日本書紀等『記紀』は権力者の手による『勝者の書』であり、『万葉』は誇り高き『敗者の書』である。『記紀』が、皇室を後ろ盾に権勢を誇った藤原氏等に不都合な歴史を隠して作られたとしたら、『万葉』は、藤原氏との権力闘争に敗れた志貴皇子など多くの皇子たちや橘氏、大伴氏等その編纂に関わったとされる人たちが作り上げた怨念と鎮魂の書である。『万葉』は、単なる歌集に止まらず、テーマを持ち、時に

はプロットさえあり、歌と歌の間の空白には、見えざる『語り』がある。その見えざる『歌物語り』を、われわれは想像力を駆使して『幻視』する。つまり、『万葉集』を幻視すると、『万葉歌物語り』が見えてくる」。

万葉集を専門的に研究したわけでもなく、学術的な知識があるべくもない門外漢ではあるが、むしろそれがゆえに、共感するところが大きい。とりわけ、「歌をポジ、空白のカタリをネガ」とし、「ポジの映像と映像の間の空間に現出する二重画像」を幻視する、などは、文字通り映像論であり、私のようなテレビ・プロデューサーにとっては、理解しがたい点もあるが、きわめて親和性は高い。「幻視の方法」の前提として、「歌をしっかりといていぬいよむ」としているが、万葉集の研究者ではない私としては、万葉研究者が読み解釈したものを参考に、それらの歌をつなぎ、乏しい想像力ではあるが、その空白を埋め、行間を読み、万葉歌の物語、つまり、「万葉集物語」を語るのが、私の立場であり、私こと、「万葉集宣伝係」の役割ではないかと思うのである。

そこで、「幻視」である。本稿で、しばしば「万葉ファンタジア」という、ドラマ形式、お芝居の脚本の形で、万葉秀歌を紹介してきた。以前書いたように、「ファンタジア」とは、「幻想、空想、想像（＝創造）」である。つまり、大浜氏の言う、「幻視」とほぼ同じ意味の類語である。大浜氏の論証を知らずして、これまで私は「万葉ファンタジア」という「幻視の手法」をとって「万葉集物語」を語っていたことになる。先に、不遜にも、私は、「大浜先生の不肖の孫弟子」と書いた。私の唯一人の万葉の師、坂本氏が「大浜万葉の唯一人の弟子」だから、そのように自称したことは前述したが、大浜氏が『万葉幻視考』を発表した半世紀後に、その「幻視論」を知らずしてささやかながら、それを実践していたことに気がつき、あえて「孫弟子」とした所以である。

『万葉幻視考』の編集にあたった坂本氏に、聞きたい、聞かねばならないと思っていた疑問を、最後にぶつけた。冒頭で、「異彩を放っている」と書いた書名についてである。

「そもそも『万葉幻視考』の最初の原稿は、雑誌『文学』に掲載され、そのタイトルは、『天智の裔の歌語り』。2回目以降は、雑誌『すばる』に移り、『新万葉考』のタイトルで連載されました。そして、最後の1回を残して、大浜先生は亡くなり、その未完で終わった原稿を、坂本先生が編集し、出版しました。本になったときの書名が、新たに『万葉幻視考』に変わっていましたが、この魅力的な書名は、大浜先生の遺言だったのですか？それとも、坂本先生の？」、「はい。大浜先生に相応しい書名を、ということで、集英社の編集者と相談して決めました。最終的には、編集のT・Kさんの案だったのではなかったかなあ？」。

T・K氏は、「すばる」の連載も担当していたようで、当時のことを聞かため、ネットでその後を追ってみたが、定年退職後の2008年から始めていたツイッターは、2013年で中断、その後亡くなられていた。

『万葉幻視考』は、この後、「後宮の歌語り——王朝文学に連なる相聞の系譜」として、歌語りの世界を物語りとして描いている。つまり、「わが幻視の世界に人麻呂と後宮の采女が浮かび上がる」として、大浜氏は、1篇のドラマを創作している。まさに、「万葉ファンタジア」である。そこで、それを、「万葉ファンタジア（特別編）」として、次回に、そのまま丸ごと転載させてもらう。これまでの私の「万葉ファンタジア」とは異なり、きわめて学術的にして、詩人の感性、歌人の想像力溢れた作品になっているので、ご覧いただきたい。

